

信を通

わす

9

礼は心に残る



作家

青木 新門氏

(あおき・しんもん)

著作権の関係上、表示できません。

映画「おくりびと」が日本の映画賞を総なめにして米国アカデミー賞まで受賞した。私が主演俳優の本木雅弘君と交信するようになったのは、16年前拙著『納棺夫日記』を上梓して間もなくのことだった。彼がインドを旅した本に『納棺夫日記』の中の一文を引用させてくれたの依頼の電話がきっかけとなり、やがて映画化したいとの申し出があつて、私は彼の熱意にほだされ「貴方しか映画化は出来ないだろう」と快諾した。

その後十年間彼はいろいろと働きかけをしたらしいが、なかなか実現しなかった。やがて彼の諦めることのない熱意が人を動かし製作委員会が立ち上がり動き出した。その時点で私は、富山で撮影することになるだろうと勝手に思い込み、地ならしをしておかねばと何人かの人に協力を願った。

中尾会長にもお願いした。その時会長は「何をしろというのか」と問われた。私は五億円ほどお願いできないかと云うと「旗を振れということか」と云われた。確約されたわけではなかったが、その時になれば考えようと前向きな返事を頂いた。やがて山形の庄内で撮影されることを

知って私は愕然とし、原作者であることを辞退した。プロデューサーが富山までやってきたが私はシナリオの内容にも文句をつけて頑として首を縦に振らなかった。次に本木君自身が富山までやって来た。彼は出された料理に手をつけることなく一時間も正座したまま姿勢を崩さなかった。私は彼の真摯な態度に感銘して「本木さん映画は映画、本は本でいいじゃないですか」と云った。そして「だが一人だけ協力を約束して頂いた方に会ってほしい」というと

本木君は「ぜひお会いさせて下さい」と応えた。その場でインテックへ電話をする。会長はおられたので二人で今から伺いたいという。帰ろうと思つていたところだからとやって来られた。本木君の所為でもないのに、山形で撮ることになつたことを会長に説明している礼儀正しい態度を見ながら私は、礼は仁や義の具体的表現とみなす儒教の教えを思い出していた。



中尾会長と本木雅弘氏